

水稻新品種「かりの舞」について

滝田 正¹・八木忠之²・荒砂英人³・川口 満⁴・日高秀光³・吉岡秀樹⁵・愛甲一郎⁴・菌田豊和⁵
(宮崎県総合農業試験場・¹北陸農業試験場・²宮崎県東臼杵北部農業改良普及センター・³宮崎県農政水産部
⁴宮崎県中部農業改良普及センター・⁵宮崎県西諸県農業改良普及センター)

Tadashi TAKITA, Tadashi YAGI, Hideto ARASUNA, Mitsuru KAWAGUCHI, Hidemitsu HIDAKA,
 Hideki YOSHIOKA, Ichirou AIKOU and Toyokazu SONODA :
 A New Rice Cultivar "Karinomai"

水稻新品種「かりの舞」は、1995年に長崎県、宮崎県、および鹿児島県において奨励品種に採用された。ここに品種の育成経過並びに特性概要を報告し、普及の参考に供したい。本品種の育成に関し、ご協力いただいた関係機関各位に深く謝意を表する。

1. 来歴および育成経過

本品種は、晩生、良食味、安定多収を目標に「ユメヒカリ」(西海186号)／「ヒノヒカリ」(南海102号)の組み合わせから育成された。1992年F₂より「南海127号」の系統名を付し、関係各県に配布して地方適応性を検討して、1996年8月に「水稻農林349号」と登録、「かりの舞」と命名された。

2. 特性の概要

1) 形態的特性: 「ユメヒカリ」と比較すると、稈長は同程度のやや短で、穂長は同程度、穂数はやや少なく、草型は偏穂重型である。止葉はやや長く直立し、草姿よく、葉色はやや淡である。ふ先色は黄白で、芒は無く、着粒密度はやや密で、脱粒性はやや易である。

2) 生態的特性: 出穂期は「ユメヒカリ」, 「ミナミヒカリ」より2日程度早く、成熟期は「ユメヒカリ」と同程度で、晩生の早に属する。稈はやや剛で、耐倒伏性は強である。収量は「ユメヒカリ」より多収, 「ミナミヒカリ」よりやや少収である。

いもち病抵抗性遺伝子型はPi-iをもつと推定され、圃場抵抗性は、葉いもちにやや弱、穂いもちに中である。白葉枯病の圃場抵抗性は中、縞葉枯病に罹病性である。

3) 品質・食味特性: 粳種で、玄米の粒形は中、粒大はやや大、千粒重は「ユメヒカリ」より重い。外観品質は心白がわずかに認められるが、「ユメヒカリ」と同程度に良質である。食味は「ミナミヒカリ」より明らかに優れ、「ヒノヒカリ」, 「ユメヒカリ」と同程度の上の中である。

3. 奨励品種採用理由

長崎県では晩生の「ユメヒカリ」は食味は良いが、収量が低く品質変動が大きいので、食味では劣るが栽培特性の優れた「シンレイ」が再度作付されている。本品種は「ユメヒカリ」の全部と「シンレイ」, 「レイホウ」の一部に替えて約1300haの作付が見込まれる。

宮崎県では晩生の「ユメヒカリ」は収量が低く、「ミナミヒカリ」は食味が不十分なことから、中生の「ヒノヒカリ」が増加し、1品種集中による労働や施設利用の競合問題等がある。「ミナミヒカリ」の全部と「ユメヒカリ」の一部に替えて約1600haの作付が見込まれる。

鹿児島県では早生の「ヒノヒカリ」と晩生の「ミナミヒカリ」の間の中生に良食味品種がないため、中生の作付比率が極端に低い問題がある。中生の「シンレイ」の全部と「ミナミヒカリ」, 「ヒノヒカリ」の一部に替えて約4500haの作付が見込まれている。

4. 栽培上の注意

- 1) 葉いもち病にやや弱なので、適期防除に努める。
- 2) やや大粒のため、刈り遅れると胴割れが発生しやすいので、適期刈取りに努める。

第1表 「かりの舞」の特性概要

品種名	かりの舞	ユメヒカリ	ミナミヒカリ	
早晚性	晩生の早	晩生の早	晩生の早	
草型	偏穂重	中間	中間	
出穂期(月・日)	9,2	9,4	9,3	
成熟期(月・日)	10,11	10,11	10,14	
稈長(cm)	77	78	75	
穂長(cm)	20.2	20.0	21.5	
穂数(本/m ²)	340	345	369	
芒の多少・長短	無	無	無	
ふ先色	黄白	黄白	黄白	
ふ色	黄白	黄白	黄白	
脱粒性	やや易	やや易	中	
耐倒伏性	強	強	強	
耐病性	葉いもち (抵抗性遺伝子)	やや弱 Pi-i	弱 +	やや弱 +
	穂いもち	中	やや弱	中
罹病性	白葉枯病	中	中	やや強
	縞葉枯病	罹病性	罹病性	罹病性
玄米重(kg/a)	52.8	49.7	54.7	
同上標準比率(%)	106	100	110	
玄米千粒重(g)	22.7	21.4	22.0	
玄米品質	上下	上下	中上	
食味	上中	上中	上下	

注) 育成地における1992～'95年の標肥試験成績